

町田圏域地域ケア推進会議報告

～コロナ禍におけるMCI・初期認知症の方の
早期発見・早期介入について～

* 去る2022年2月25日にオンラインで開催した「町田圏域 地域ケア推進会議」の結果をお伝えします

① 開始挨拶

町田市高齢者福祉課地域支援係
氏家崇裕 担当係長

市では「認知症とともに生きるまちづくり」の推進を掲げており、「認知症の方への早

期対応・早期受診に向けた支援」は取り組みの柱です。皆様がそれぞれの立場で、認知症の疑いのある方に早期に気づき、ご本人やご家族に情報提供をしたり、専門医の受診や介護サービスの利用、介護負担軽減に繋げる支援をしたりしていただくことが、非常に重要であると考えております。

＜会議出席者数＞

医師	3名
歯科医師	6名
薬剤師	42名
医療機関	8名
ケアマネジャー	29名
介護サービス事業所	6名
市役所	4名
高齢者支援センター	10名
合計	108名

② 発表 早期受診・早期対応に向けた認知症施策について

＜医師によるもの忘れ相談＞

町田第3高齢者支援センター 田中一恵

▶導入のきっかけ	相談者	町1	町2	町3	合計	%
	ご家族	19	9	16	44	63%
	介護支援専門員	3	1	3	7	10%
	ご本人	3	9	2	14	20%
	近隣住民	2	0	1	3	4%
	支援センター	2	0	0	2	3%
	合計	29	19	22	70	100%
	合計	29	19	22	70	100%

▶その後の経過	連携先	町1	町2	町3	合計	%
	病院受診(専門医)	5	0	6	11	16%
	主治医に紹介状を提供し病院受診	3	2	6	11	16%
	介護保険新規申請し、サービス利用	6	3	3	12	17%
	成年後見制度利用	4	0	2	6	9%
	自主グループに参加	0	0	1	1	1%
	その他	11	14	4	29	41%
	合計	29	19	22	70	100%

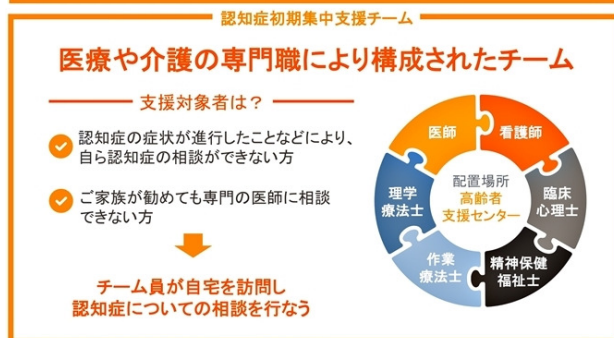
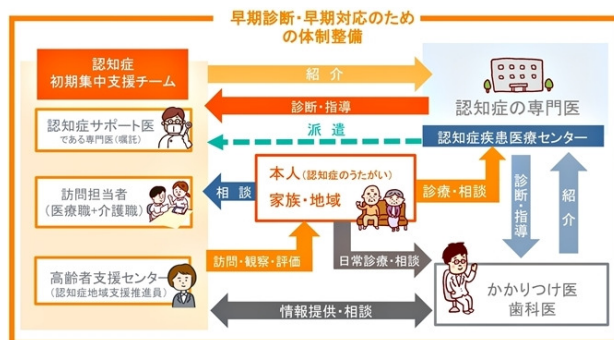
専門医の定期受診に繋がらない認知症、または、その疑いのある高齢者とご家族等に指導や助言を行います。医師が自宅に出向くことで、早期受診の大切さを直接伝えられます。

＜認知症初期集中支援チーム＞

認知症疾患医療センター
鶴川サナトリウム病院
精神保健福祉士 村山秀人 様



早期発見・早期介入することで、ご本人の意思決定を尊重した態勢づくりが可能であり、ご本人の本当のニーズを確認できる「備え型支援」を行えます。多様な職種が専門性を生かしてチームでアプローチします。認知症の診断をするだけでなく、地域の社会資源に繋げ、地域で生活を続けていただけるようにすることが目的です。そのための連携・協働を意識しています。初期集中支援の相談窓口は各高齢者支援センターです。ぜひご活用下さい。



② 発表(つづき)

〈認知症カフェの取り組み〉



薬樹(株) 薬樹薬局原町田
土志田敏伸 様



■認知症カフェは、認知症の人やご家族、支援者、地域住民などが気軽に集まって交流や情報交換をする場です。

■市内には思いを持った方がたくさんいらっしゃり、様々な実施主体・タイプのカフェがあります。『まちだDカフェマップ』をご活用下さい。



▲Dカフェマップ
(市ホームページより入手できます)

③ 意見交換

- ① 業務の中で認知症と疑われる方に気づいたとき、異変を感じたのはどのような点か。また、その後、どのように対応したか。
- ② 早期発見・早期介入のために必要なこと、ご自身でできることとは、どのようなものか。

〈発表より〉

- 早期発見はできても、早期がゆえに介入が難しい。主治医やキーパーソンが不在の場合、困難さが増す。早期介入・継続的介入のためには連携が必要。(共創未来町田木曾薬局 池上様)
- 薬のやり取りなどの際に「おかしいな」と感じたら、高齢者支援センターに連絡している。ただ、どのレベルで相談したらよいのか迷うことがある。初期の段階だと、ご本人やご家族に伝えにくい。(薬樹薬局原町田旭町 野口様)
- 気づきのポイントや各職種役割分担を共有することが大切。(こんどう整形外科居宅 深谷様)
- 介入のタイミングが難しい。何とか生活できている間は、見守ることも支援となるのではないか。(さんりつ皮膚科・在宅クリニック 村山様)

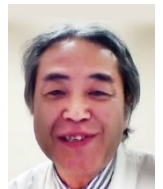
●介入のきっかけを作るためには情報共有が重要となる。そうした場面でも、おくすり手帳を活用した連携に期待できる。(町田市歯科医師会 山田先生)

〈書記シートより〉

- 情報共有や介入のきっかけをつかむためには、ご家族や主治医を含めたチームづくりが重要。連絡しやすいフォーマットがあるといいのではないか。
- 認知機能の低下により、どこに問題が生じているのか、フローチャートを作るなど問題の核心をつくことが大切。

④ 総評 近藤医院 近藤 聡 医師

早期介入のためには、認知症・物忘れについての理解が進み、「物忘れがある」と気軽に言える地域となることが望ましいです。そのための啓発活動が今後も必要です。



認知症かもしれないと感じたときには、積極的にかかりつけ医に相談してほしいと思います。今後も検討を進めていきましょう。

⑤ 抽出された課題

- (1) 対象となる方の異変に気づいたとき、タイムリーに連携を取るための、①連携手段、②関係性の構築、が必須であり、一層の連携協働推進を必要とします。
- (2) 認知症に対する負のイメージがあるため、ご本人・ご家族が隠そうとする傾向があります。認知症の実相について、支援者や市民に向けてさらなる啓発を行い、「認知症とともに生きるまちづくり」を推進する必要があります。

*2020年度に本会議にて検討しました、多職種連携促進を目的とした「おくすり手帳カバー」の使用が市内全域に拡大しました。活用・連携の事例をぜひお知らせ下さい。